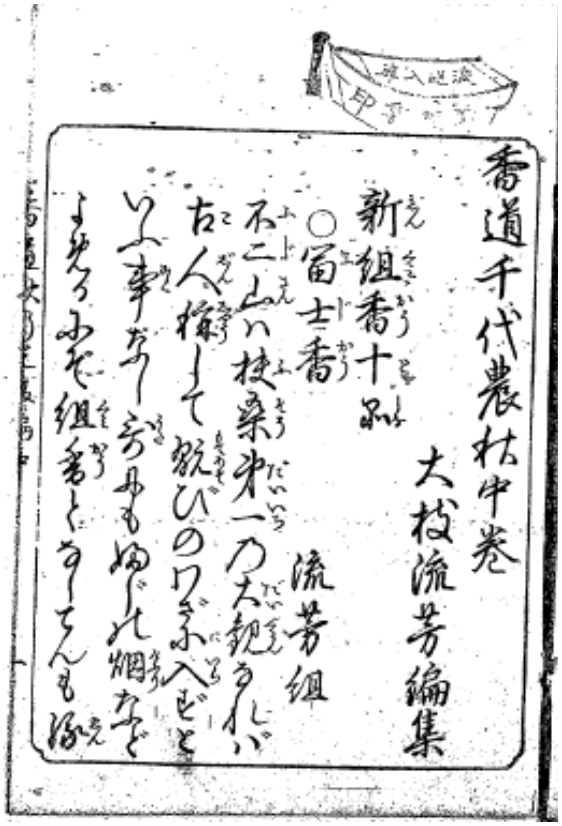


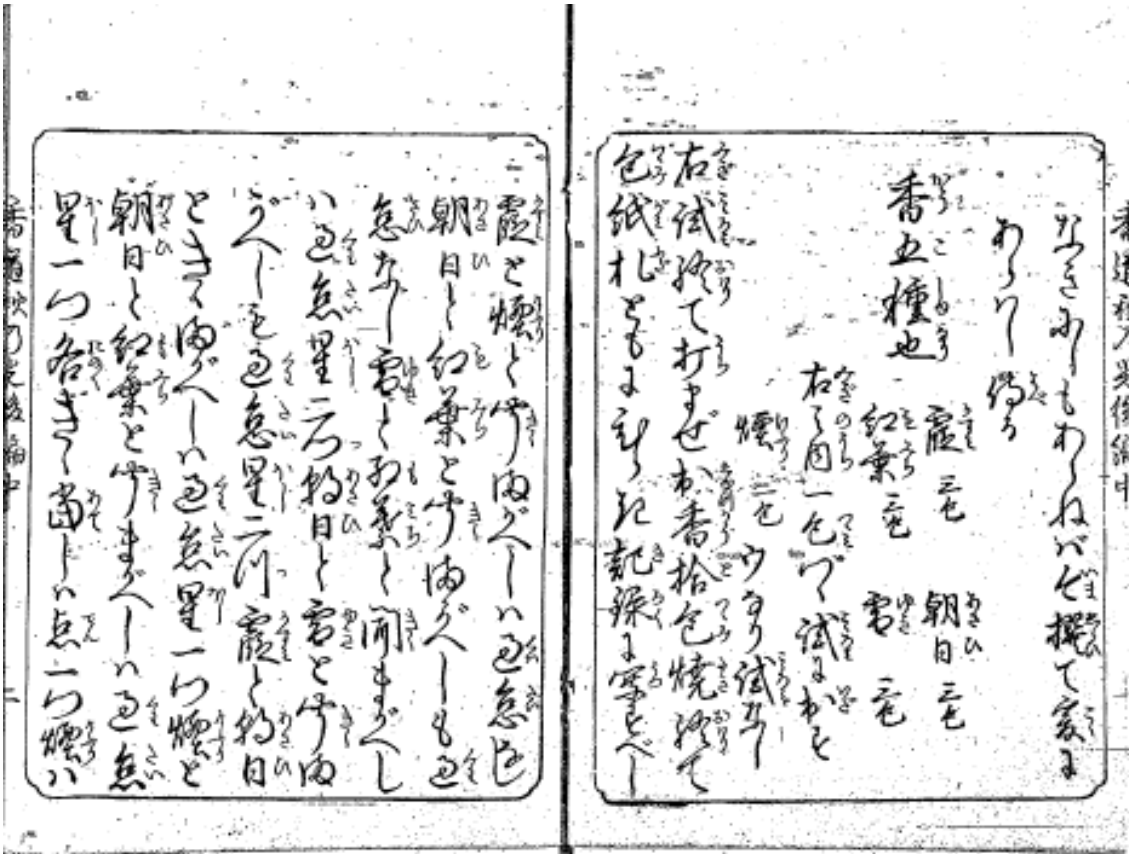
香道千代農秋中巻

大枝流芳編集

新組香十品

○冨士香（ふじこう）　流芳組

不二山は扶桑第一の大観なれば、
古人称して翫びのわざに入らずと
いう事なし。歌にも「ふじの烟」など
よめるにぞ、組香となしてんも縁



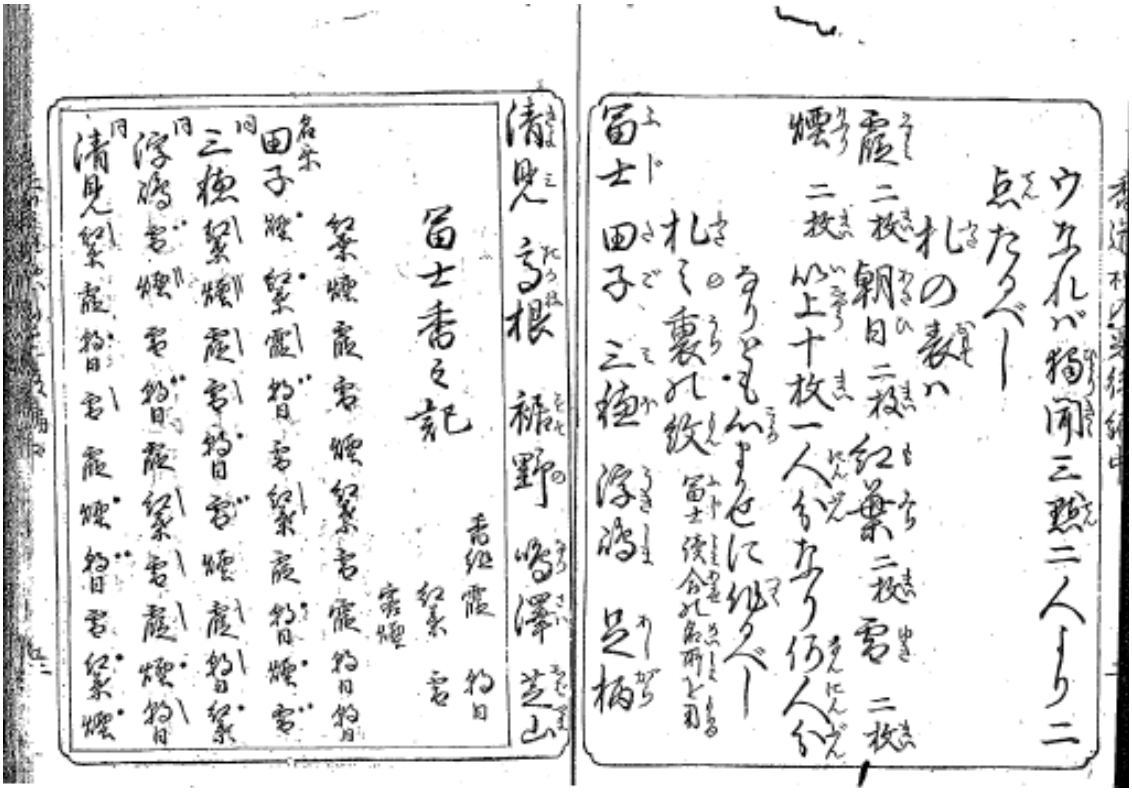
なきにしもあらねば、今、撰びてここにあらわし侍る。

香五種也

「霞」三包　「朝日」三包
「紅葉」三包　「雪」三包
右の内一包ずつ　試みに出す。
「煙」二包　ウなり。試みなし。

右試み終りて打ちまぜ出香拾(十)包焼き終りて、包紙、札ともにひらき、記録に写すべし。

「霞」と「煙」と聞きまがえしは過怠なし。「朝日」と「紅葉」と聞きまがえしも過怠なし。「雪」と「紅葉」と聞きまがえしは過怠星二つ、「朝日」と「雪」と聞きまがえしも過怠星二つ、「霞」と「朝日」と聞きまがえしは過怠星一つ、「煙」と「朝日」と「紅葉」と聞きのまがえしは過怠星一つ。各々聞き当てしは点一つ、煙は



「ウ(客香)」なれば独聞き三点、二人より二点たるべし。

札の表は

「霞」二枚　「朝日」二枚　「紅葉」二枚　「雪」二枚

「煙」二枚

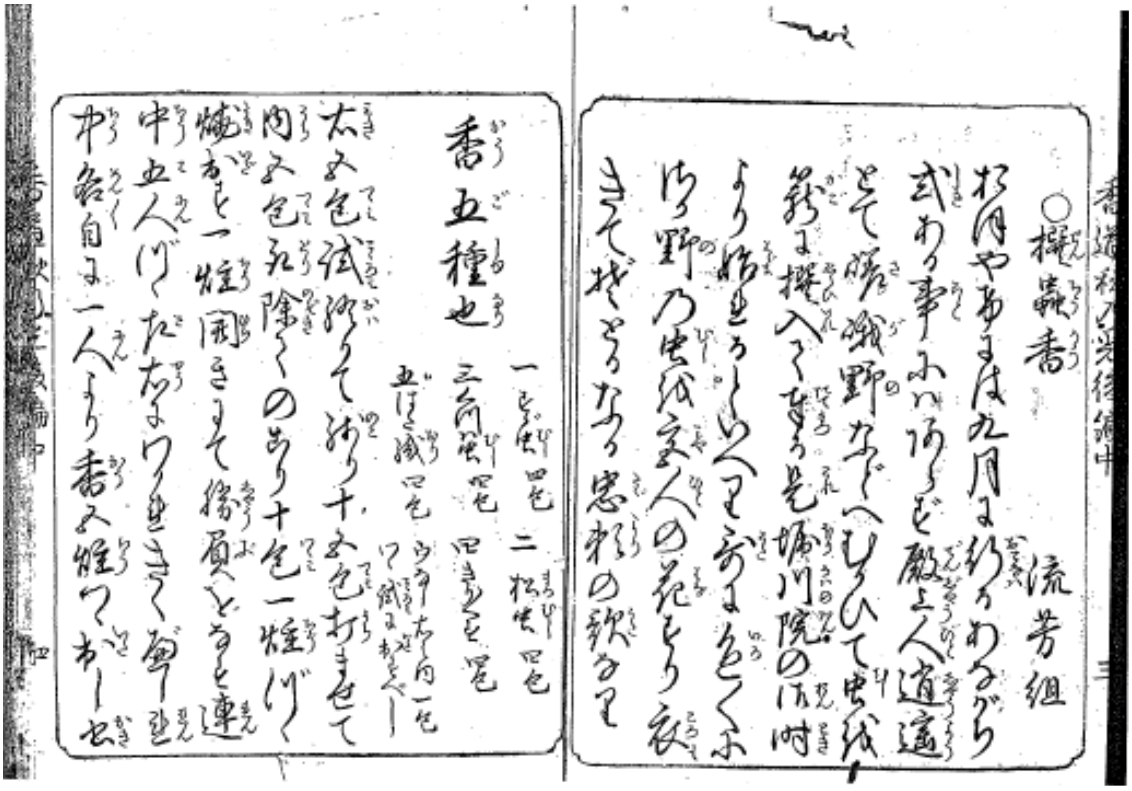
以上十枚一人分なり。何人分なりとも心まかせに作るべし。

札の裏の紋　冨士読合せの名所を用ゆ。

「冨士」「田子」「三穂(保)」「浮嶋」「足柄」

「清見」「高根」「裾野」「鳴澤(なりさわ)」「芝山」

[冨士香之記]



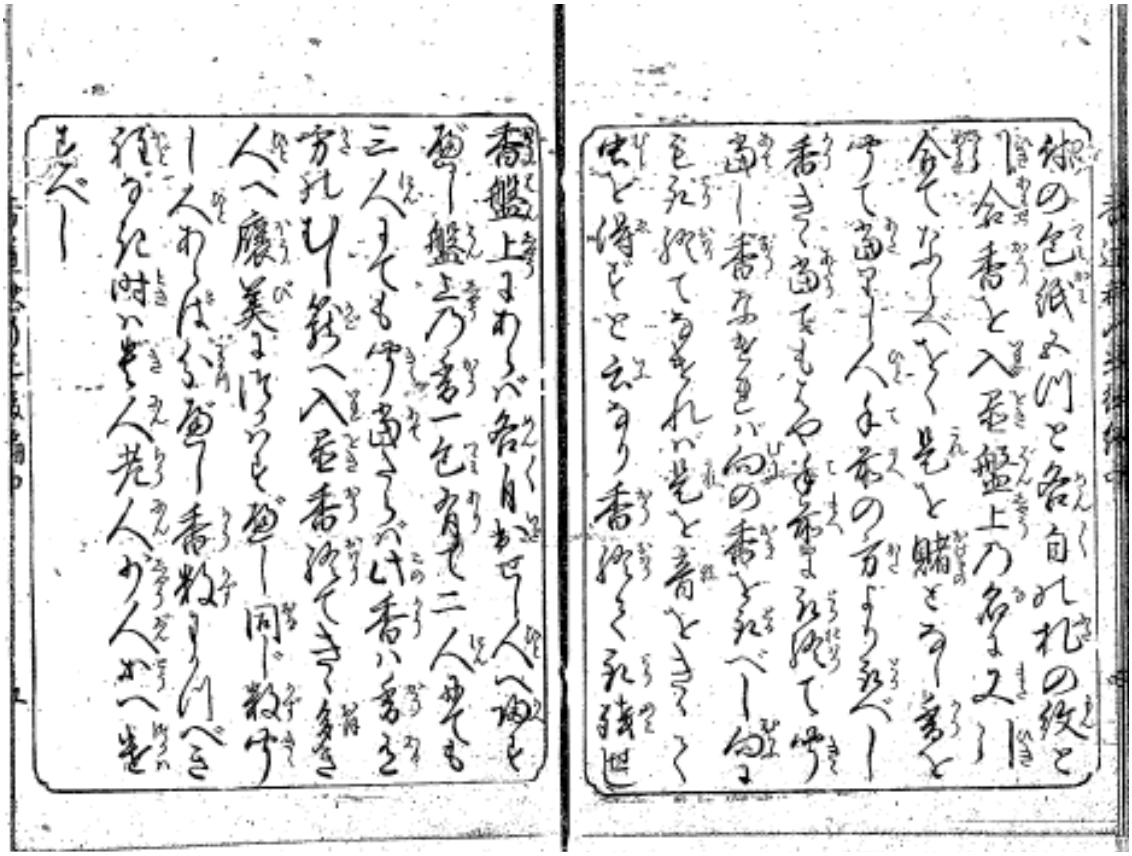
○撰蟲香（せんちゆうこう）　流芳組

おおやけには九月に行わる。あながち式ある事にはあらず。殿上人、「逍遥」とて嵯峨野などへむかいて虫を籠に撰び入れて奉る。是、堀川院の御時より始まれるといえり。歌に「色々にさが野の虫を宮人の花すり衣きてぞとるなる」忠頼の歌なり。

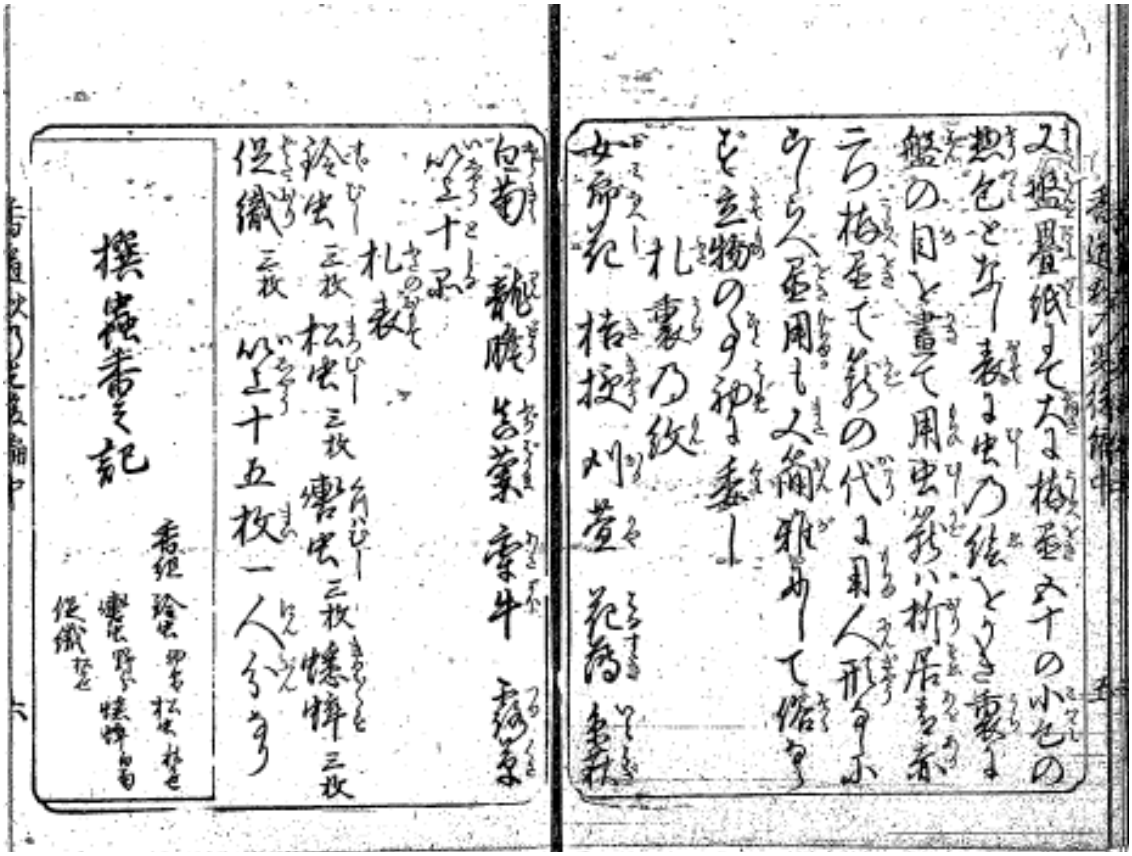
香五種也

一「すず虫」四包　二「松虫」四包
三「くつわ虫」四包　四「きりぎりす」四包
五「はた織」四包　ウなし。右の内一包ずつ試みに出すべし

右五包、試み終りて残り十五包打ちまぜて、内五包取り除きて、のこり十包一炷ずつ焼き出す。一炷開きにて勝負をなす。連中五人ずつ左右にわかれきくべし。連中、各自（めんめん）に一人より香五炷ずつ出だし、書き



付けの包紙五つと各自の札の紋と
引き合わせて香を入れ置き、盤上の名にまた引き
合わせてならべおく。是を「賭（かけもの）」となし、香を
聞きて、当たりし人、手前の方より取るべし。
香聞き当りて、もはや手前に取り終りて聞き
当てし香なければ、向うの香を取るべし。向うに
も取り終りてなければ是を「音を聞きて
虫を得ず」と云うなり。香終りて取り残せし
香、盤上にあらば、各自出だせし人へかえす
べし。盤上の香一包有りて、二人にても、
三人にても聞き当たらば、此の香は香ある
方の「むし籠」へ入れ置き、香終りてきき多き
人へ褒美につかわすべし。同じ数聞き
し人あらば分かつべし。香数わかつべき
数なき時は、貴人、老人、少人等へ遣
わすべし。



又、盤畳紙にて大きに拵え置き、五十の小包の惣包となし、表に「虫の絵」をかき、裏に「盤の目」を画きて用い、「虫籠」は折居、青、赤二つ拵え置きて籠の代わりに用ゆ。人形なしにこしらえ置き用ゆるも又、簡雅にして俗ならず。立物の事初めに委し。

札裏の紋

「女郎花」「桔梗」「刈萱」「花薄」「糸萩」

「白菊」「龍胆」「真蘭（ふじばかま）」「牽牛（あさがお）」「露草」

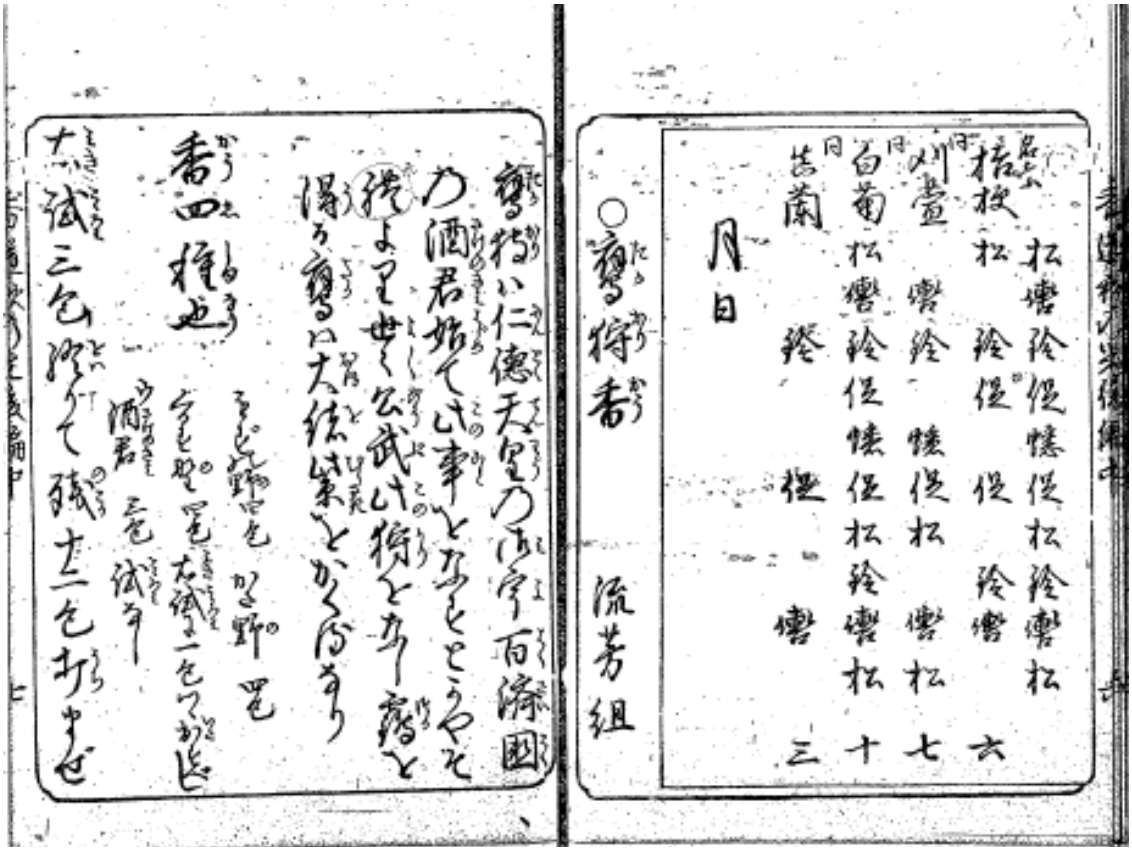
以上十品

札表

「鈴虫」三枚　「松虫」三枚　「轡虫」三枚　「蟋蟀（きりぎりす）」三枚

「機織（はたおり）」三枚　以上十五枚一人分なり。

［撰蟲香之記］



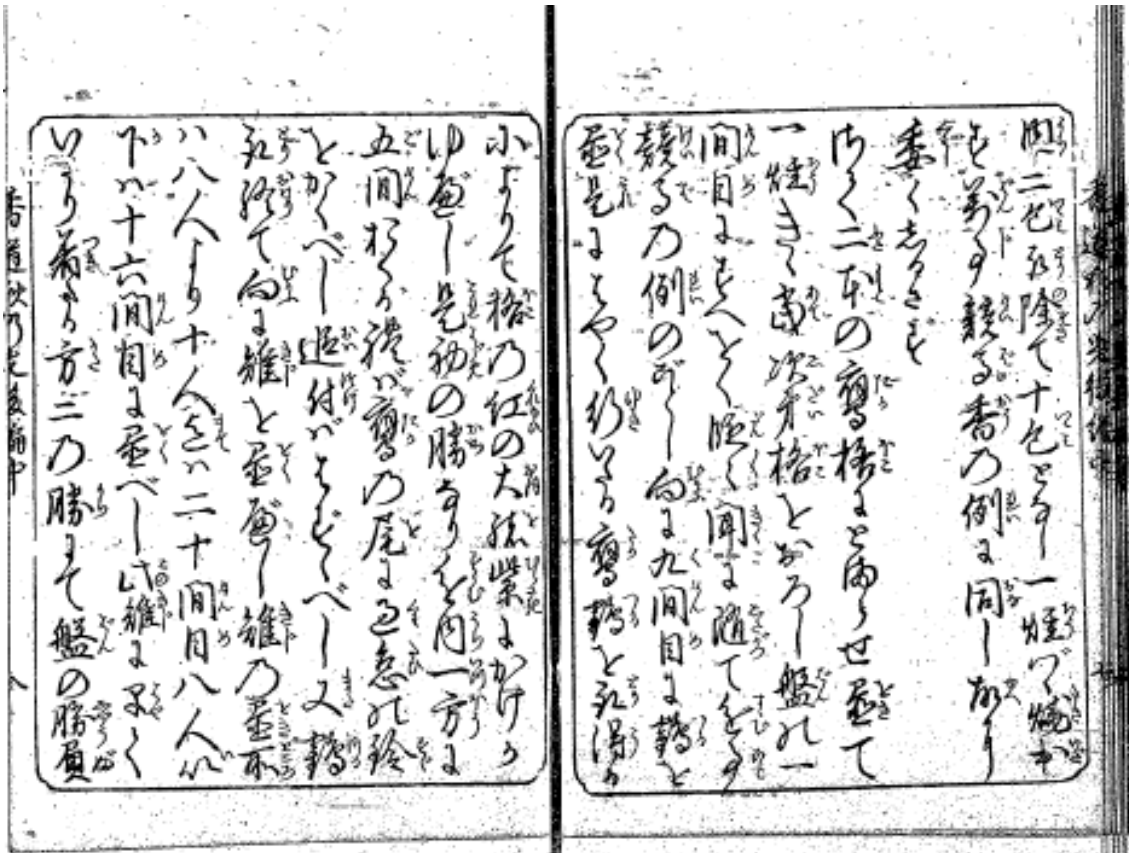
○鷹狩香（たかがりこう）　流芳組

鷹狩は、仁徳天皇の御宇、百済国の
酒君（さけのきみ）始めて此の事をなすとかや。そ
れより世々公武、此の狩をなし、鶴を
得る鷹は大緒紫（おおおむらさき）をかくるなり。

香四種也

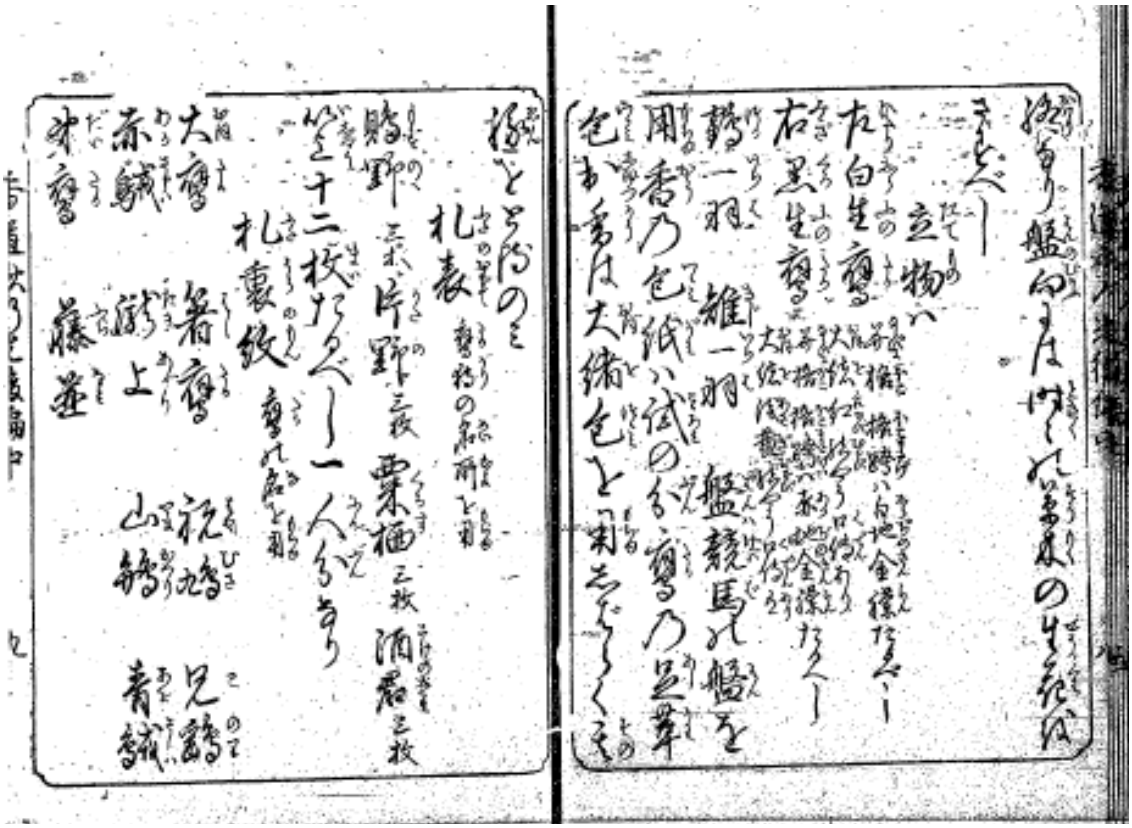
「もずの野」四包　「かた野」四包
「くるす野」四包　右試みに一包ずつ出すべし。
ウ「酒君（さけのきみ）」三包　試みなし。

右試三包終りて、残り十二包打ちまぜ、



内二包取り除きて十包となし、一炷ずつ焼き出だす。万事「競馬香」の例に同じ。故に委しくしるさず。

さて、二本（ふたもと）の鷹、「格（ほこ→架）」にとまらせ置きて、一炷きき当て次第、桙をおろし、盤の一間目にすえおく。段々聞きに随いて進む事「競馬」の例のごとし。向うに九間目に「鶴」を置く。是にはやく行きいたる「鷹」、「鶴」を取り得るによりて、桙の「紅」の大緒、「紫」にかけかゆべし。是「初めの勝」なり。進む内、一方に五間おくるれば鷹の尾に「過怠の鈴」をかくべし。追い付けば、はずすべし。また、鶴取り終りて向うに「雉」を置くべし。「雉」の置き所は八人より十人までは二十間目、八人以下は十六間目に置くべし。此の「雉」に早くいたり着きたる方、「二の勝」にて、盤の勝負



終りなり。盤の向うには時々の草木の「生花」をさすべし。

立物は

左 白生鷹（しらぶのたか）

並びに鉾 鉾跨は白地の金襴たるべし。

大緒紅、結びよう口伝あり。

右 黒生鷹（くろぶのたか）

並びに鉾 鉾跨は赤地の金襴たるべし。

大緒浅黄、結びよう口伝有り。

「鶴」一羽 「雉」一羽 盤は、「競馬香」の盤を用ゆ。香の包紙は試みの分、「鷹の葦草包」。出香は「大緒包」を用ゆ。しばらくその縁をとるのみ。

札の表 鷹狩の名所を用ゆ

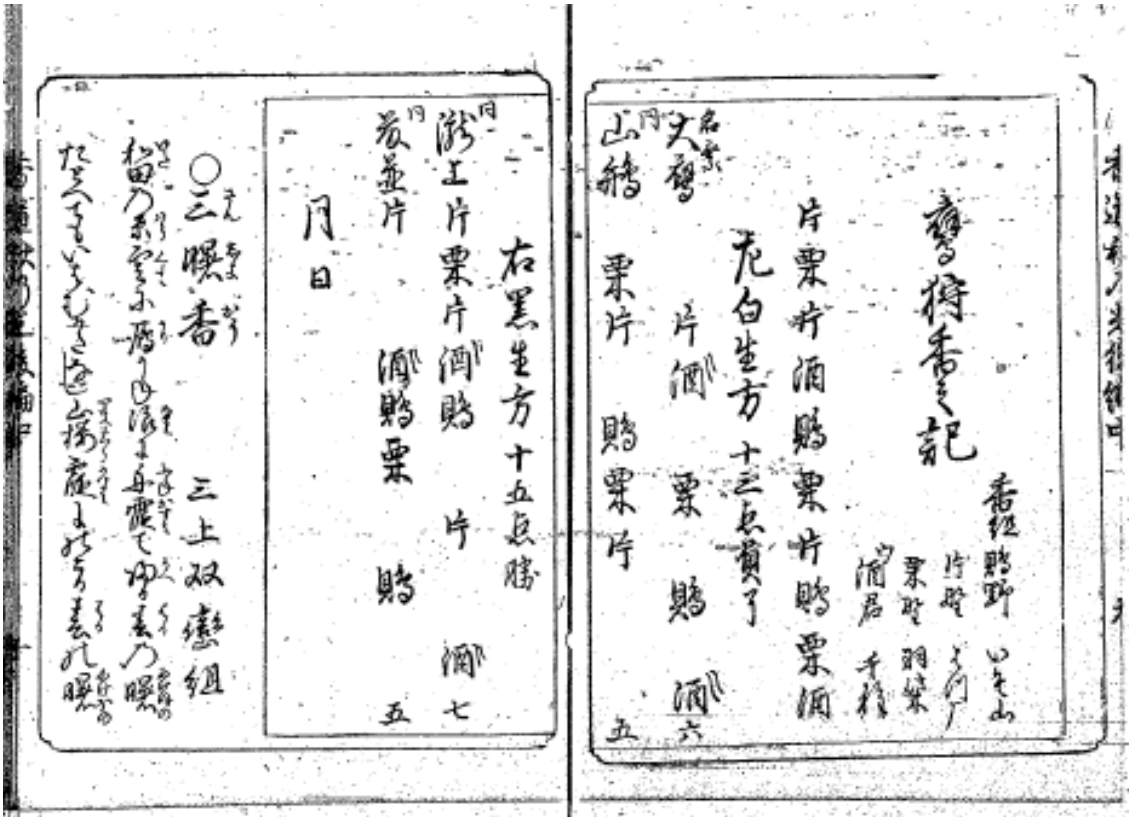
「鵙野」三枚 「片野」三枚 「来栖」三枚 「酒君」三枚

以上十二枚たるべし。一人分なり。

札裏の紋 鷹の名を用ゆ

「大鷹」「箸鷹」「祝鳩（はやむさ＝はやぶさ）」「兄鷂（このり）」「赤鸇（さしば）」「瀧上」「山鴉（やまがえり）」「青鸇」「第鷹」「藤並」

※ 「鸇」は、鳥篇に戒と書く字（表外）



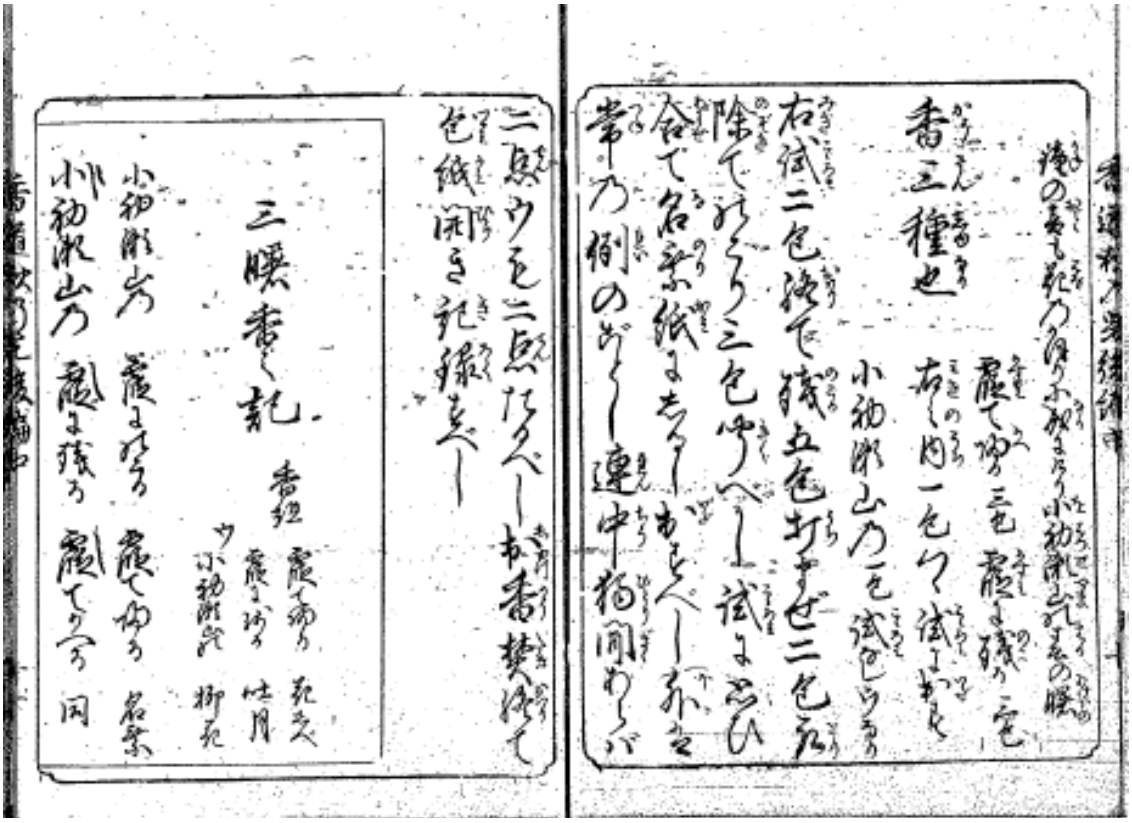
［鷹狩香之記］

○三曙香（さんしょこう）　三上双巒組

※ 双巒（そうらん＝連なる山）

「和田の原雲に雁がね浪に舟霞て帰る春の曙」

「たとえてもいはむかたなし山桜霞にのこる春の曙」



「鐘の音も花のかほりに成りにけり小初瀬山の春の曙」

香三種也

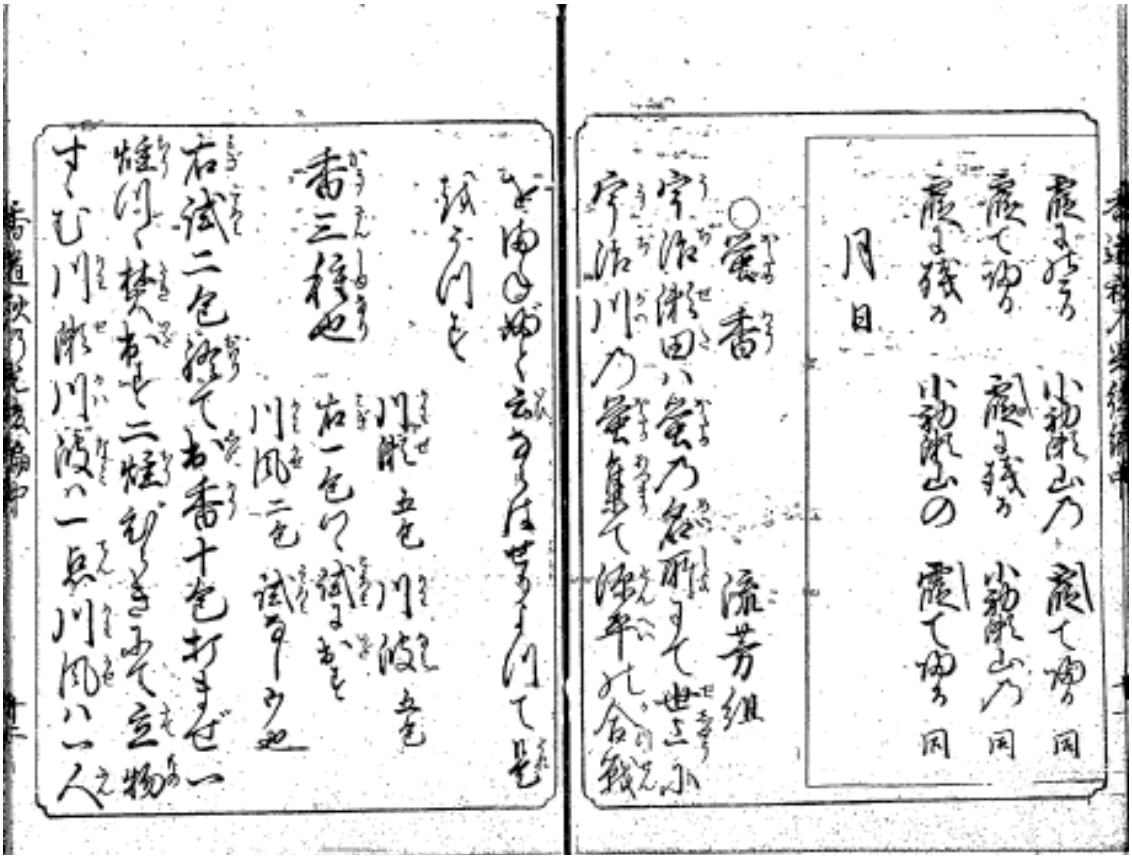
「霞て帰る」三包　「霞に残る」三包

右の内一包ずつ試みに出す。

「小初瀬山」の　一包　試みなし。ウなり。

右試み二包終りて、残る五包打ちまぜ、二包取り除きて、のこり三包聞くべし。試みに思い合わせて名乗紙にしるし出すべし。外は常の例のごとし。連中、独聞(ひとりぎき)あらば二点、「ウ」も二点たるべし。出香焚き終りて包紙開き記録すべし。

[三曙香之記]



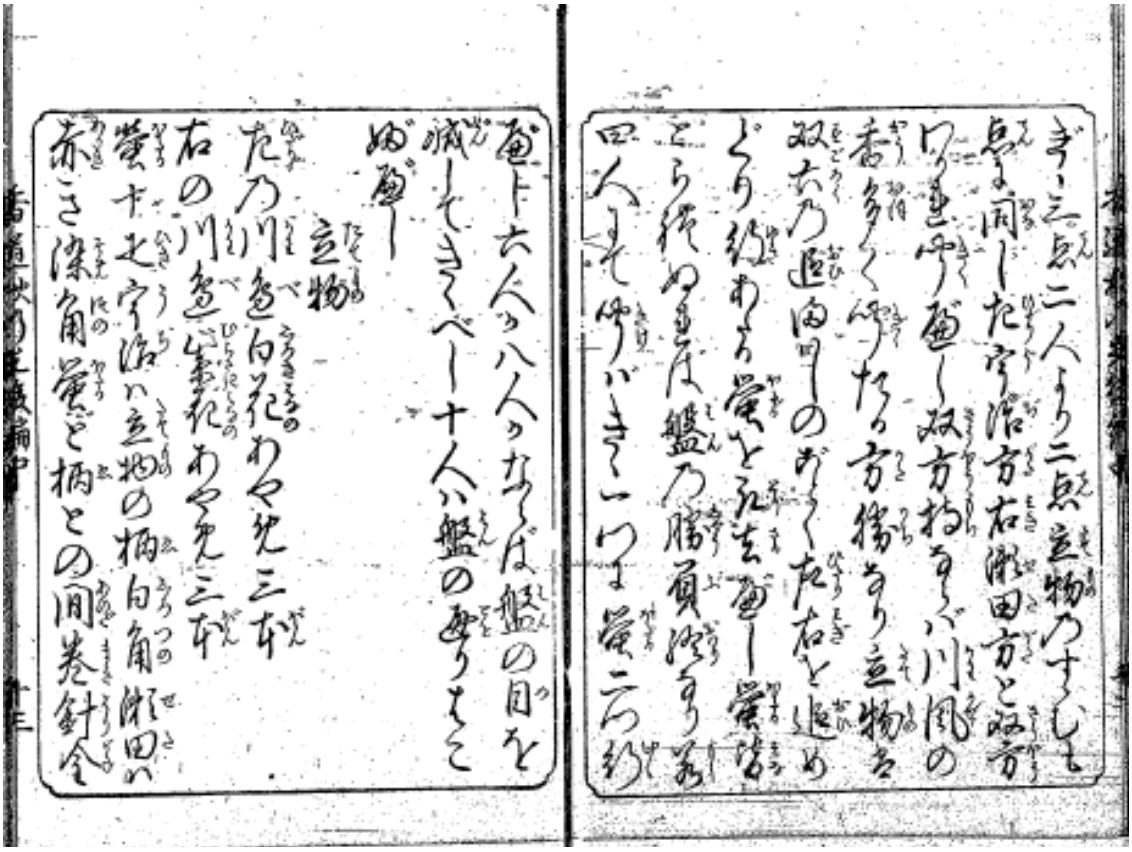
○蛍香(ほたるこう)　流芳組

宇治瀬田は蛍の名所にて、世上に「宇治川の蛍集めて源平の合戦をまねぶ」と云いならわせり。よって是をうつす。

香三種也

「川瀬」五包　「川波」五包
右の内一包ずつ試みに出す。
「川風」二包　試みなし。ウなり。

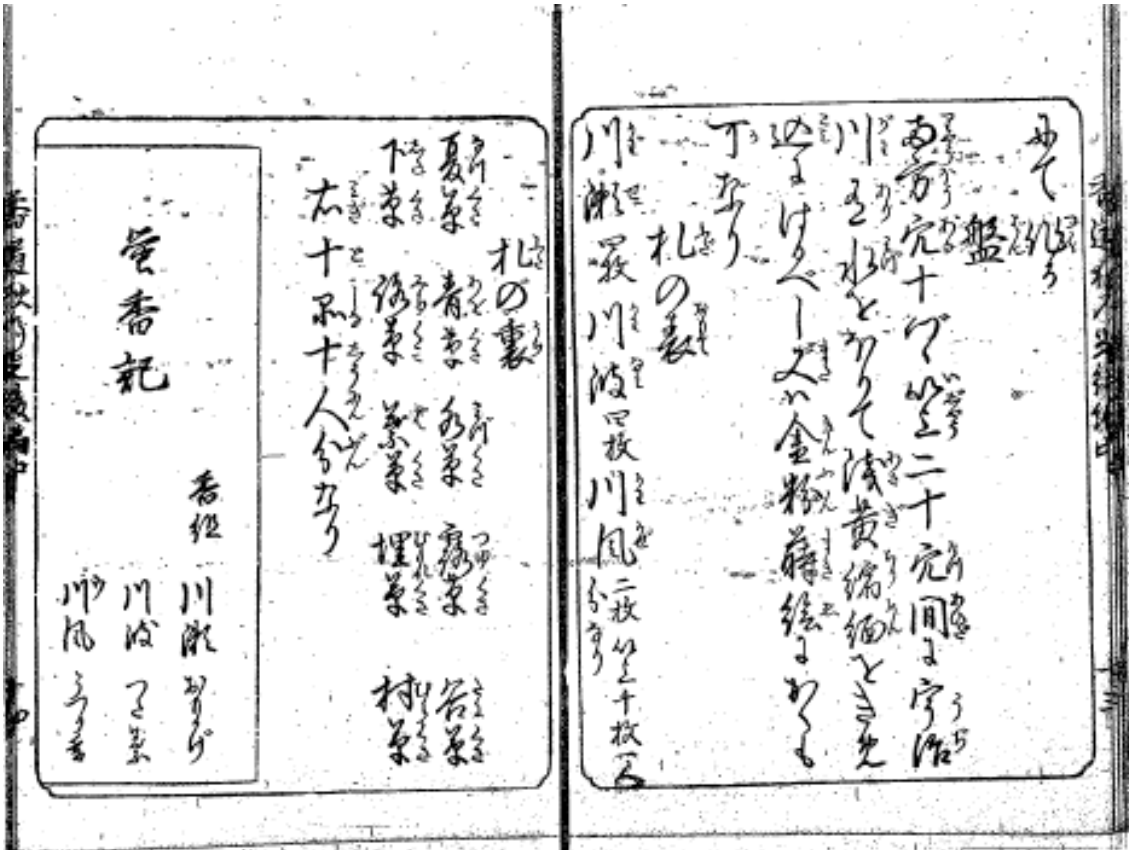
右試み二包終りて、出香十包打ちまぜ、一炷ずつ焚き出す。二炷びらきにて立物すすむ。「川瀬」、「川波」は一点。「川風」は一人



ぎき三点、二人より二点。立物のすすむも
点に同じ。左「宇治方」、右「瀬田方」と双方
わかれ聞くべし。双方、「持（もち＝同点）」ならば「川風」の
香多く聞きたる方「勝」なり。立物は、
双六の追いまわしのごとく左右を追いめ
ぐり、行きあたる「蛍」を取り去るべし。「蛍」皆
とられぬれば、「盤の勝負」終りなり。もし、
四人にて聞けば、きき一つに「蛍」二つ行く
べし。六人か八人かならば、盤の目を
減じてきくべし。十人は盤の通りはこ
ぶべし。

立物

左の川辺「白花のあやめ」三本
右の川辺「紫花のあやめ」三本
「蛍」十定　「宇治（方）」は立物の柄、白角、「瀬田（方）」は
赤き染め角　蛍と柄との間、巻針金



にて作る

盤

両方穴十ずつ、以上二十穴。間に「宇治川」有り。水をほりて浅黄縮緬をきめ込みにはるべし。または金粉蒔絵にかくも可なり。

札の表

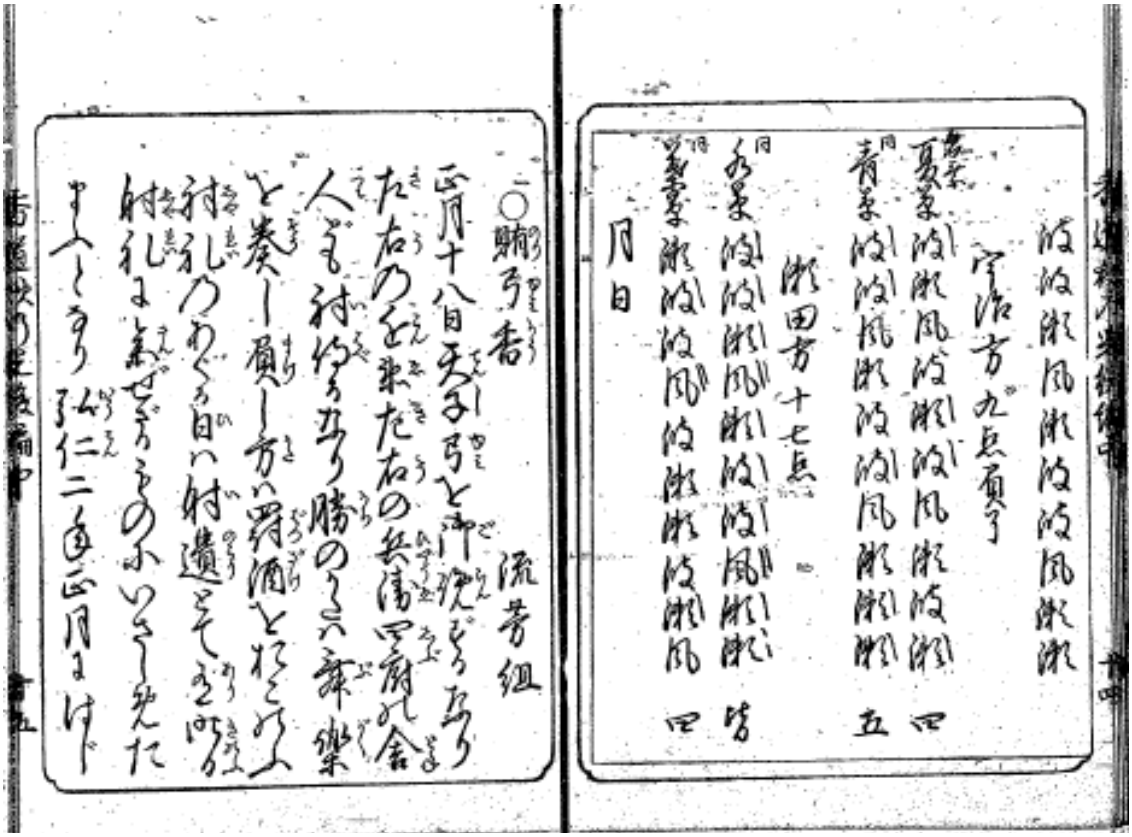
「川瀬」四枚　「川波」四枚　「川風」二枚　以上十枚一人分なり。

札の裏

「夏草」「青草」「水草」「露草」「谷草」「下草」「路草」「葉草」「埋草（うもれぐさ）」「村草」

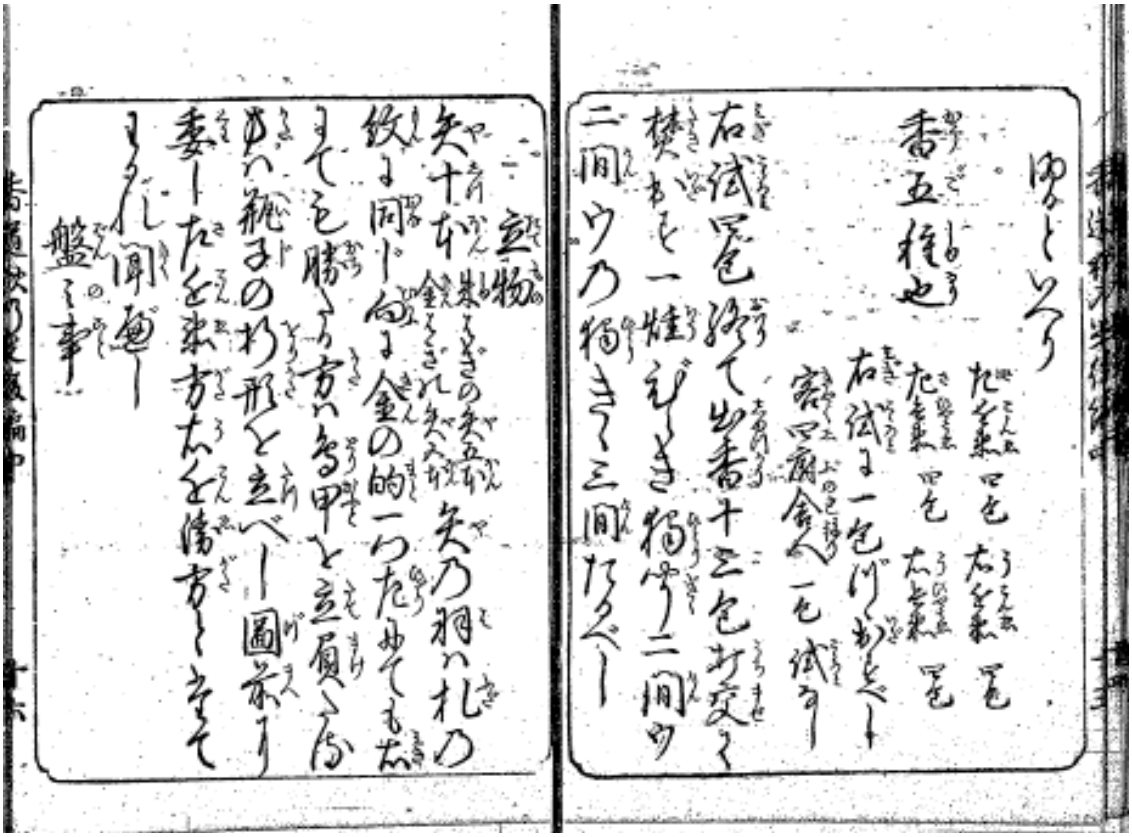
右十品十人分なり。

［蛍香記］



○賄弓香(のりゆみこう)　流芳組

正月十八日、天子、弓を御覧ずるなり。
左右の近衛(こんえ)、左右の兵衛(ひょうえ)、四府(しぶ)の舎
人(とねり)ども射侍るなり。勝ちのかたは「舞楽」
を奏し、負けし方は「罰酒(ばつざけ)」をおこのう。
射礼のあくる日は「射遺(いのこり)」とてあり。昨日、
射礼に参ぜざるものにいさしめ
たまうとなり。弘仁二年正月にはじ



まるといえり。

香五種也

「左近衛」四包　「右近衛」四包

「左兵衛」四包　「右兵衛」四包

右試みに一包ずつ出すべし。

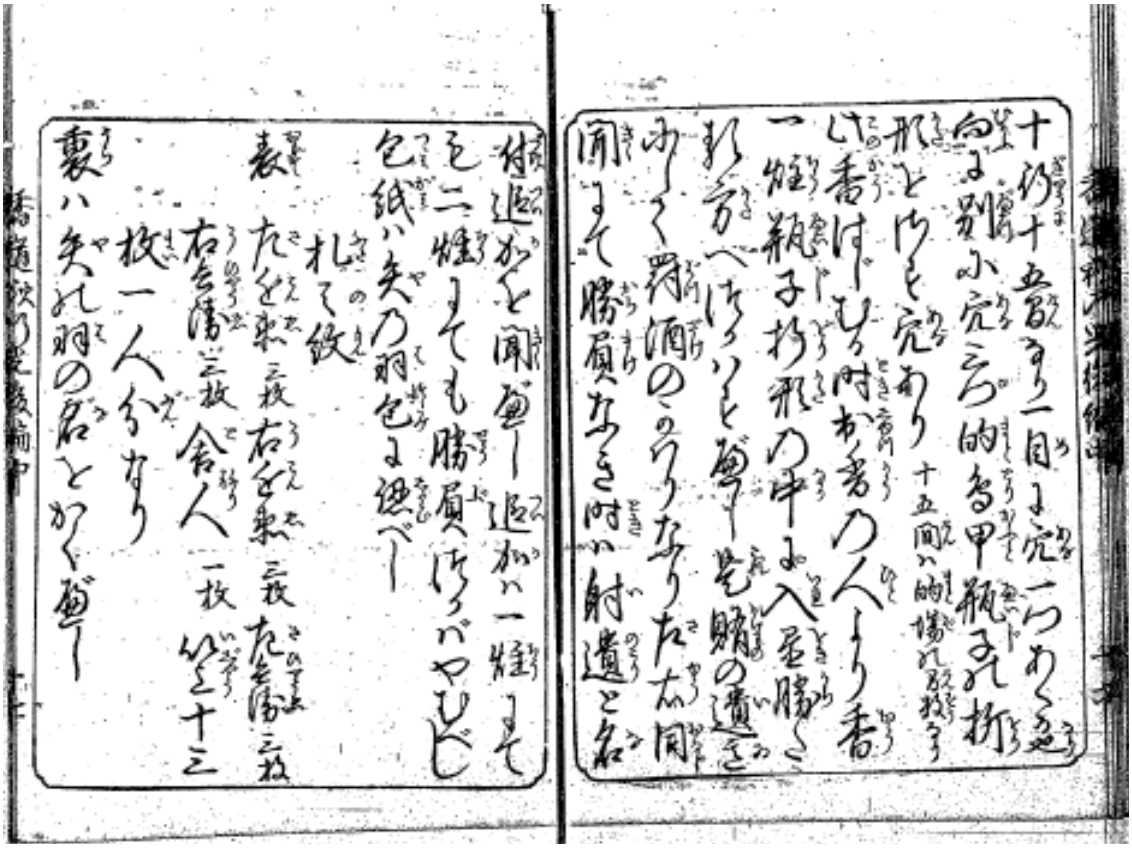
客「四府舎人（しぶのとねり）」一包　試みなし。

右試み四包終りて、出香十三包打ち交ぜて焚き出す。一炷びらき、独聞二間、ウ二間、ウの独ぎき三間たるべし。

立物

「矢」十本（朱はぎの矢五本、金はぎの矢五本）矢の羽は札の紋に同じ。向うに「金の的」一つ、左にても右にても勝ちたる方は「鳥甲（とりかぶと）」を立て、負けたる方は「瓶子の折形」を立つべし。図、前に委し。「左近衛方」、「右近衛方」とたてわかれ聞くべし。

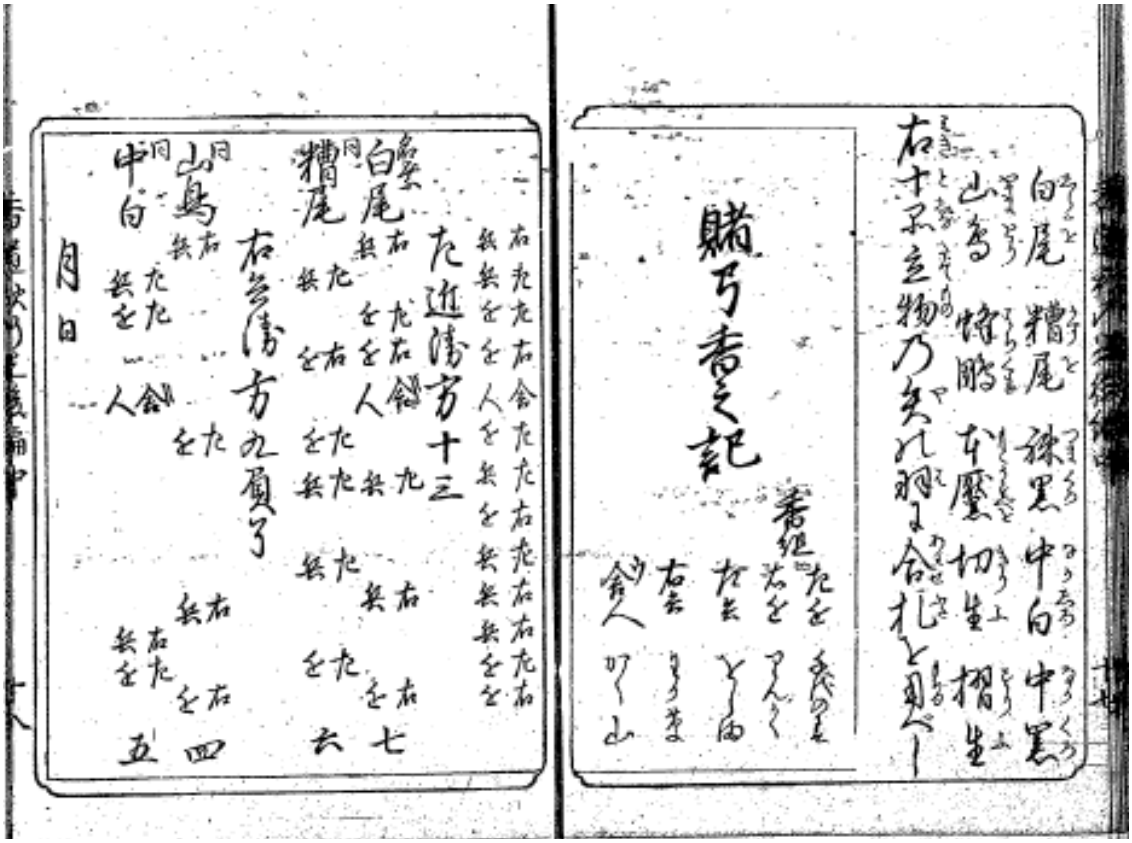
盤の事



十行十五間なり。一目に穴一つ。あくるなり。
向うに別に穴三つ、「的」、「鳥甲」、「瓶子の折形」をさす穴あり。（十五間は的場の間数なり。）
此の香はじむる時、出香の人より香
一炷「瓶子折形」の中に入れ置き、勝ちたる方へつかわすべし。是、「賭（かけもの）」の遺意にして、罰酒のかわりなり。左右同じ
聞きにて勝負なき時は、「射遺」と名付け追加を聞くべし。追加は一炷にても二炷にても勝負つかばやむべし。
包紙は「矢の羽包」に認（したたむ）べし。

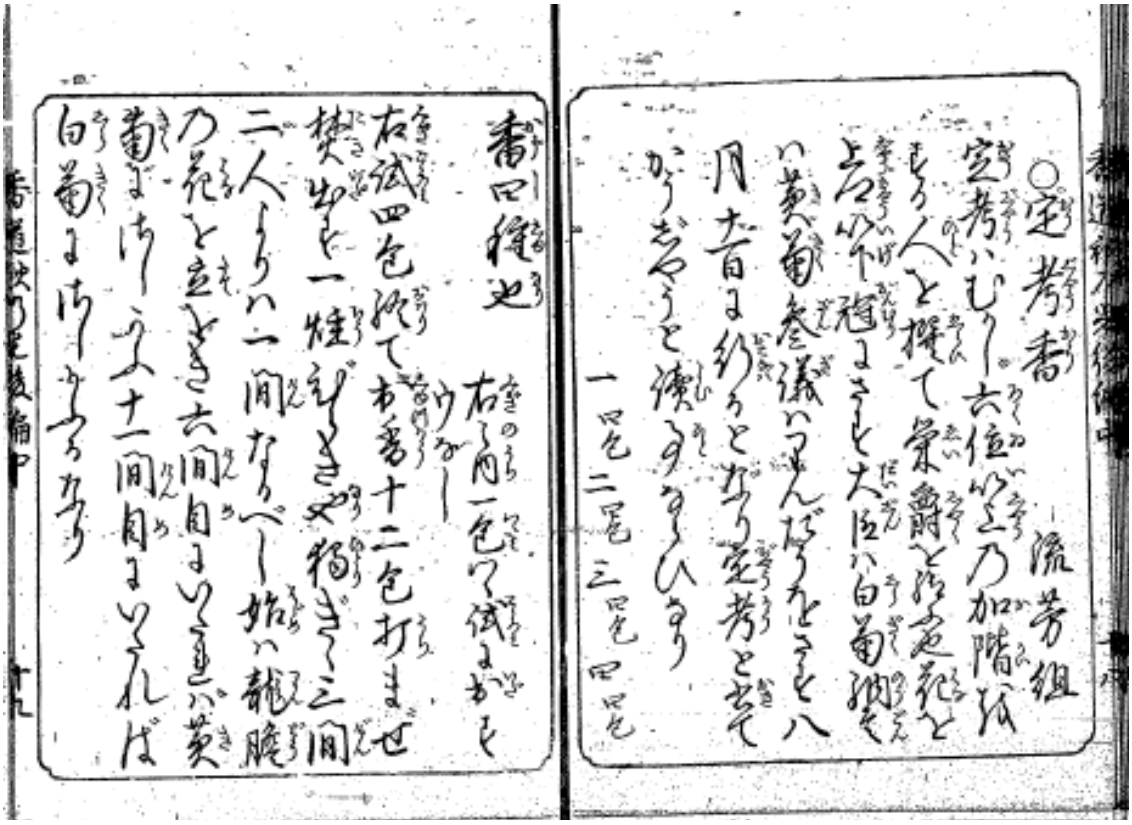
札の紋

表「左近衛」三枚　「右近衛」三枚　「左兵衛」三枚
「右兵衛」三枚　「舎人」一枚　以上十三
枚一人分なり。
裏は矢の羽の名を書くべし。



「白尾」「糟尾」「褄黒(つまぐろ)」「中白」「中黒」
「山鳥」「蜂鵰(はちくま)」「本黐(もとうすべお)」
「切生(きりゅう)」「摺生(すりゅう)」
右十品、立物の矢の羽に合わせ札を用ゆべし。

[賄弓香之記]



○定考香（こうじょう香）　流芳組

定考は、むかし六位以上の加階をする人を撰びて栄爵（えいしゃく）を給うなり。花を上卿以下冠にさす。大臣は白菊、納言（のうごん）は黄菊、参議はりんどう（龍胆）をさす。八月十一日に行わるとなり。「定考」と書きて「こうじょう」と読む事ならいなり。

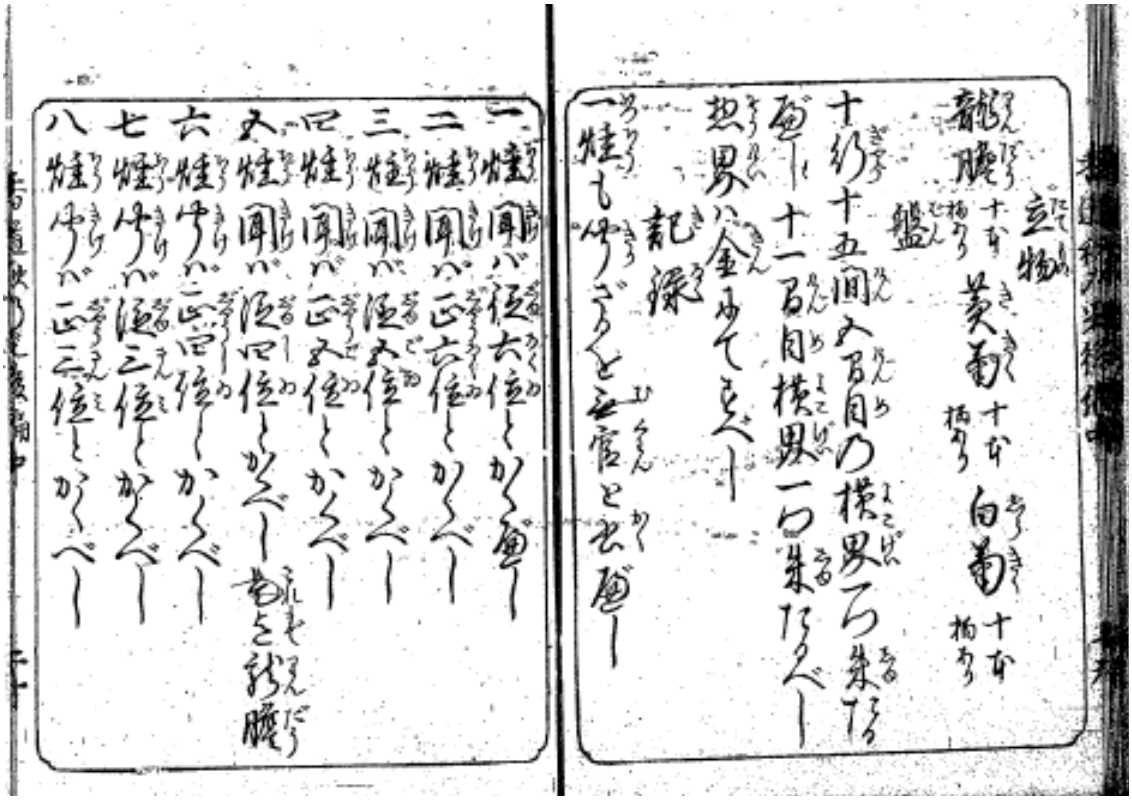
香四種也

「一」四包　「二」四包　「三」四包　「四」四包

右の内一包ずつ試みに出す。

ウなし。

右試み四包終りて、出香十二包打ちまぜ焚き出す。一炷びらきなり。独りぎき三間、二人よりは一間なるべし。始めは「龍胆」の花を立ておき、六間目にいたれば「黄菊」にさしかう。十一間目にいたれば「白菊」にさしかうるなり。



立物

「龍胆」十本　「黄菊」十本　「白菊」十本

柄あり　柄あり　柄あり

盤

十行十五間、五間目の横界（よこげい）一つ朱たるべし。十一間目横界一つ朱たるべし。

惣界は金にてすべし。

記録

一炷も聞かざるを「無官」と書くべし。

一炷聞けば「従六位」とかくべし。

二炷きけば「正六位」とかくべし。

三炷聞けば「従五位」とかくべし。

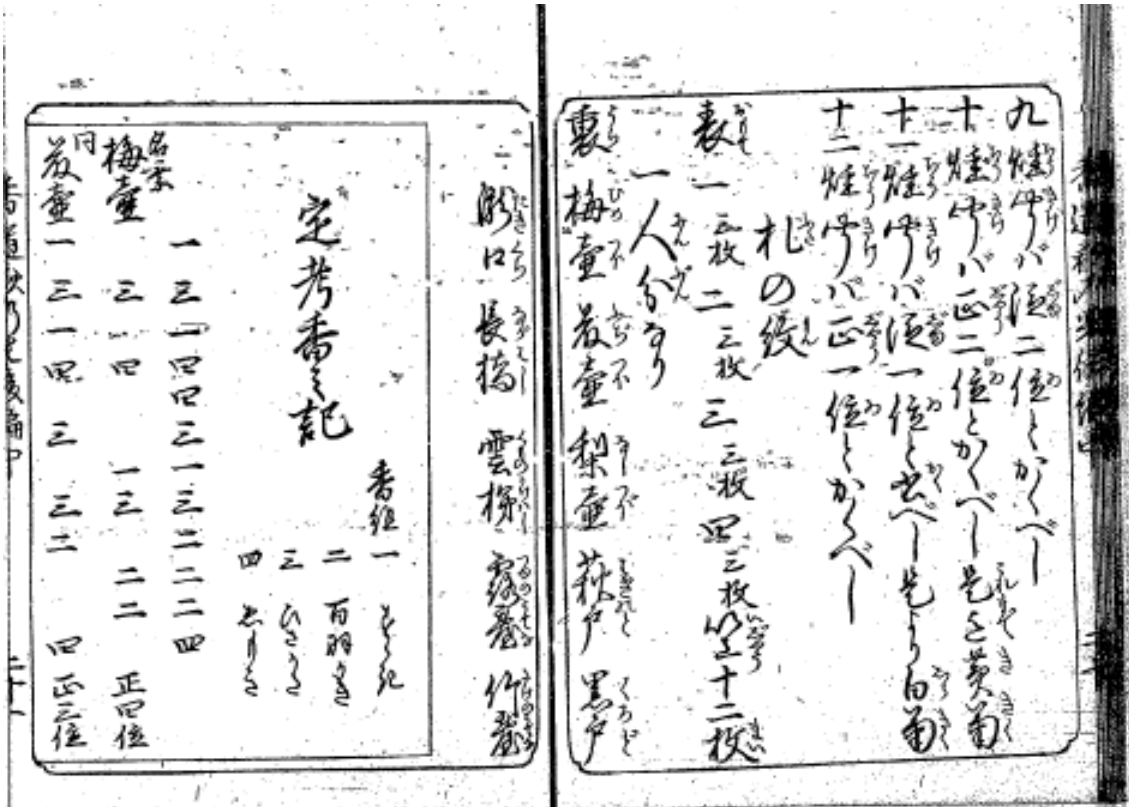
四炷聞けば「正五位」とかくべし。

五炷聞けば「従四位」とかくべし。是迄「龍胆」

六炷聞けば「正四位」とかくべし。

七炷聞けば「従三位」とかくべし。

八炷聞けば「正三位」とかくべし。



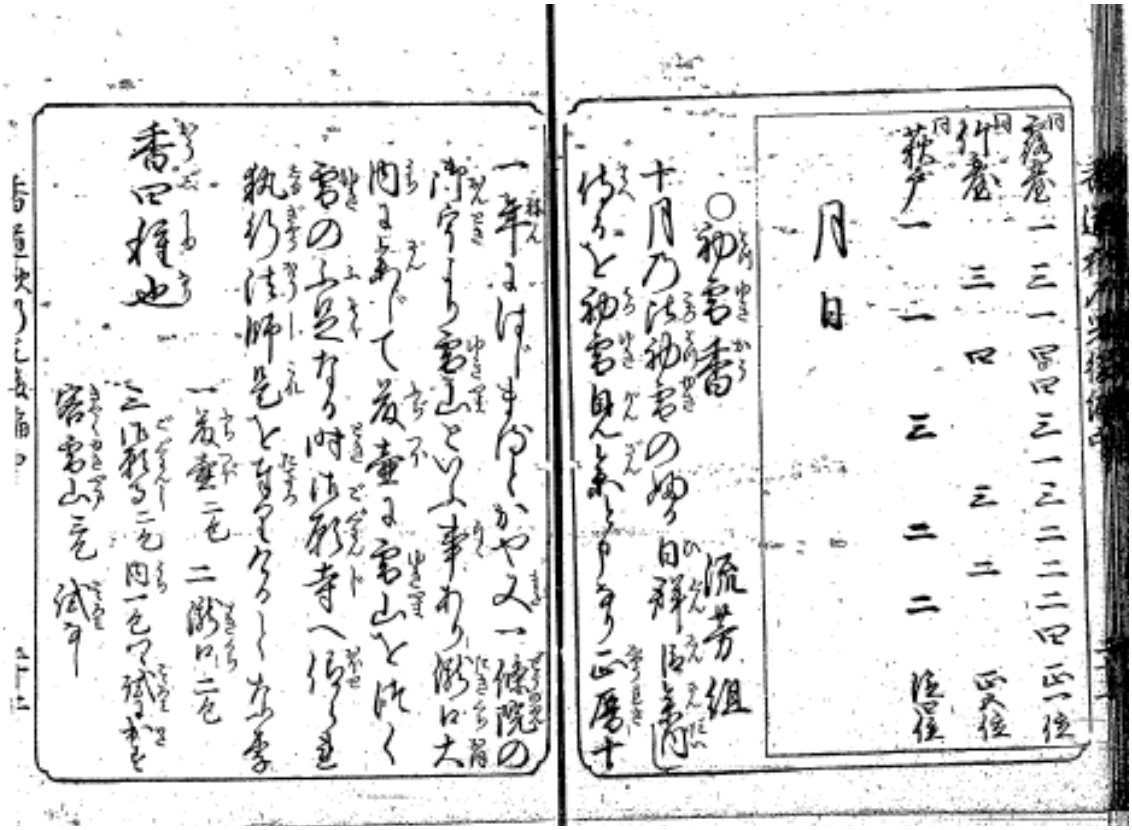
九炷聞けば「従二位」とかくべし。
十炷聞けば「正二位」とかくべし。是迄「黄菊」
十一炷聞けば「従一位」とかくべし。是より「白菊」
十二炷聞けば「正一位」とかくべし。

札の紋

表「一」三枚　「二」三枚　「三」三枚　「四」三枚
以上十二枚
一人分なり。

裏「梅壷」「藤壷」「梨壷」「萩戸（はぎのと）」「黒戸（くろど）」
「瀧口」「長橋」「雲梯（くものかけはし）」
「露臺（つゆのうてな）」「竹臺（たけのうてな）」

［定考香之記］

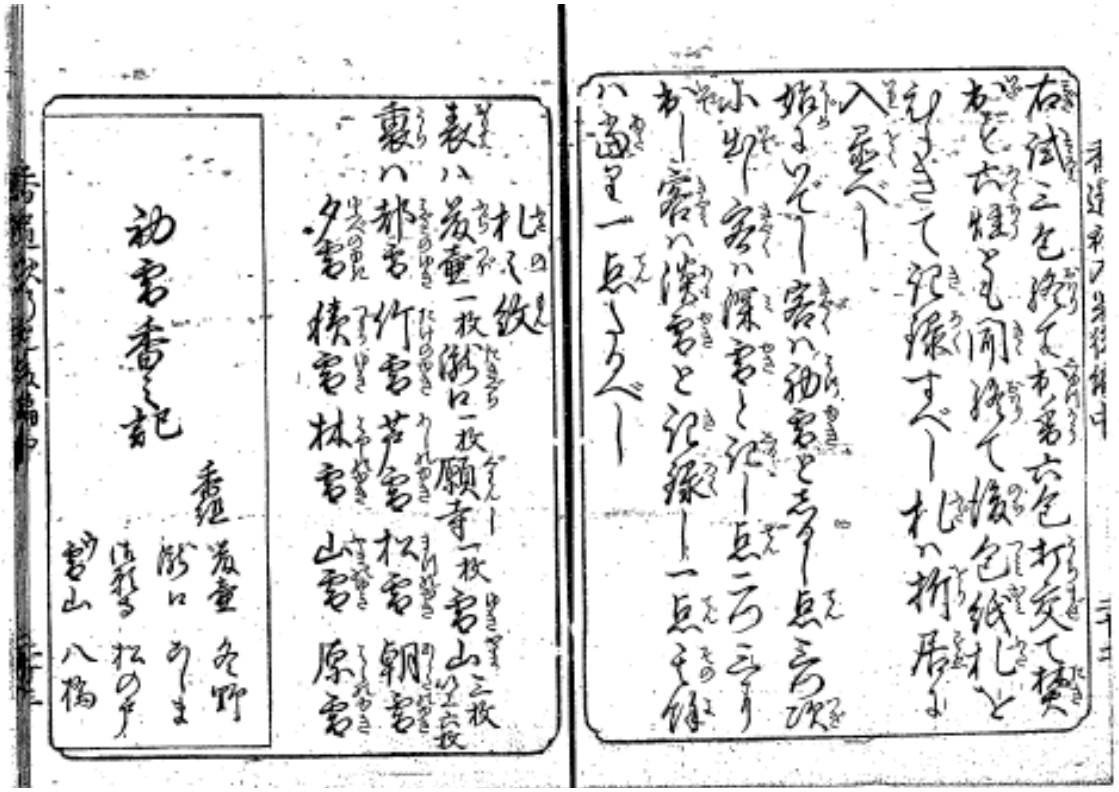


○初雪香（はつゆきこう）　流芳組

十月の頃、初雪のふる日、群臣参内し
侍るを「初雪見参（はつゆきげんざん）」と申すなり。正暦十
一年にはじまるとかや。また、一條院の
御宇（おんとき）より、雪山という事あり。瀧口大
内に参じて藤壺に雪山をつく。
雪の不足なる時、御願寺（ごがんじ）へ仰せられ、
執行法師（しゅぎょうほうし）、是を奉りけるとなり。

香四種也

一「藤壺」二包　二「瀧口」二包
三「御願寺」二包　内一包ずつ試みに出す。
客「雪山」三包　試みなし。



右試み三包終りて、出香六包打ち交ぜて焚き出す。六炷とも聞き終りて後、包紙、札をひらきて記録すべし。札は折居に入れ置くべし。

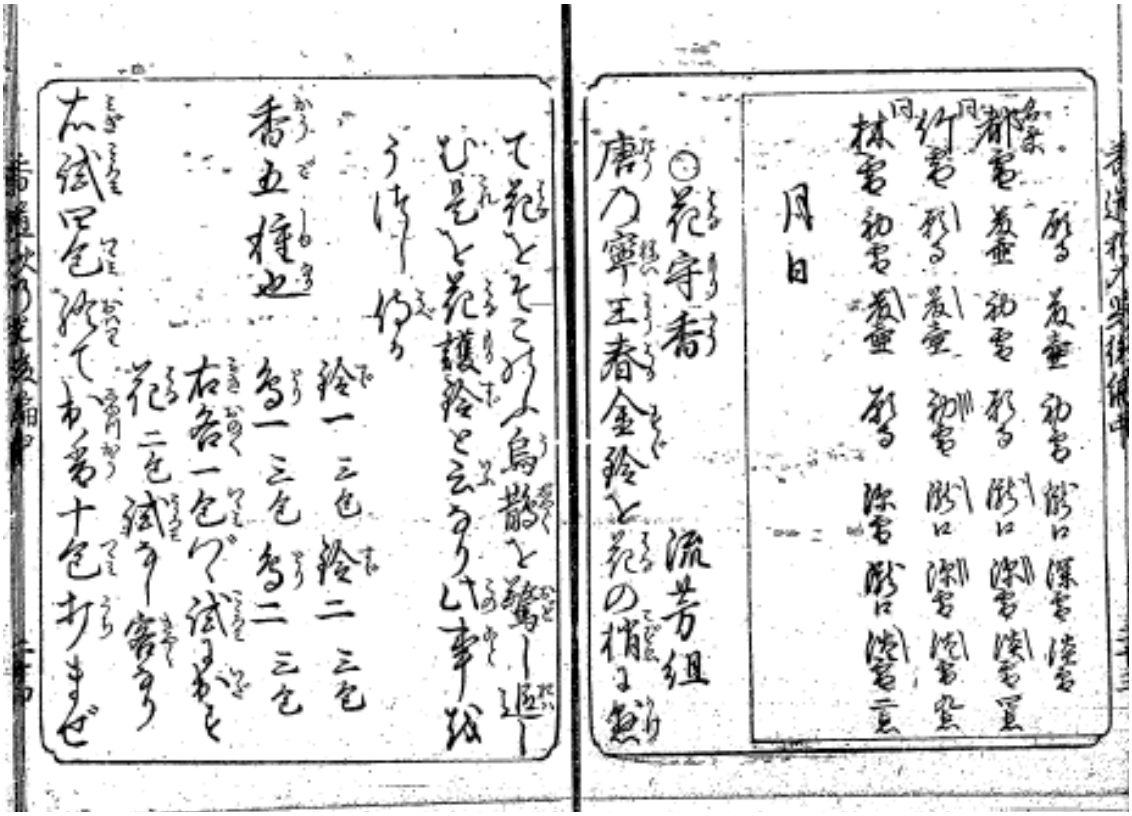
始めにいでし客は「初雪」としるし点三つ、次に出でし客は「深雪」と記し点二つ、三に出でし客は「淡雪」と記録し一点、その餘は当り一点たるべし。

札の紋

表は、「藤壺」一枚　「瀧口」一枚　「願寺」一枚
「雪山」三枚　以上六枚

裏は、「都雪（みやこのゆき）」「竹雪（たけのゆき）」「芦雪（あしのゆき）」「松雪（まつのゆき）」「朝雪（あしたのゆき）」「夕雪（ゆうべのゆき）」「積雪（つもるゆき）」「林雪（はやしのゆき）」「山雪（やまのゆき）」「原雪（はらのゆき）」

［初雪香之記］



○花守香（はなもりこう）　流芳組

唐の寧王、春、金鈴（すず）を花の梢に懸けて、花をそこのう（損う）烏鵲（うじゃく）を驚し追わしむ。是を花護鈴（はなもりすず）と云うなり。此の事をうつし侍る。

香五種也

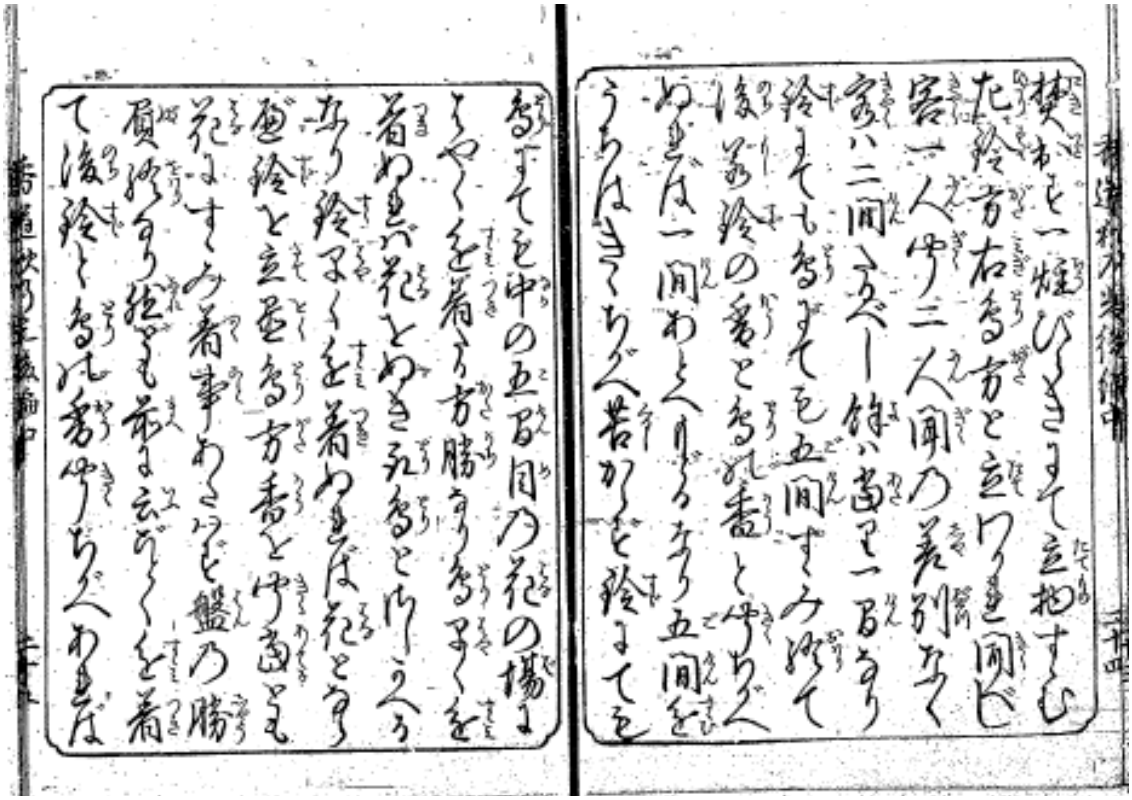
「鈴一」三包　「鈴二」三包

「鳥一」三包　「鳥二」三包

右各々一包ずつ試みに出す。

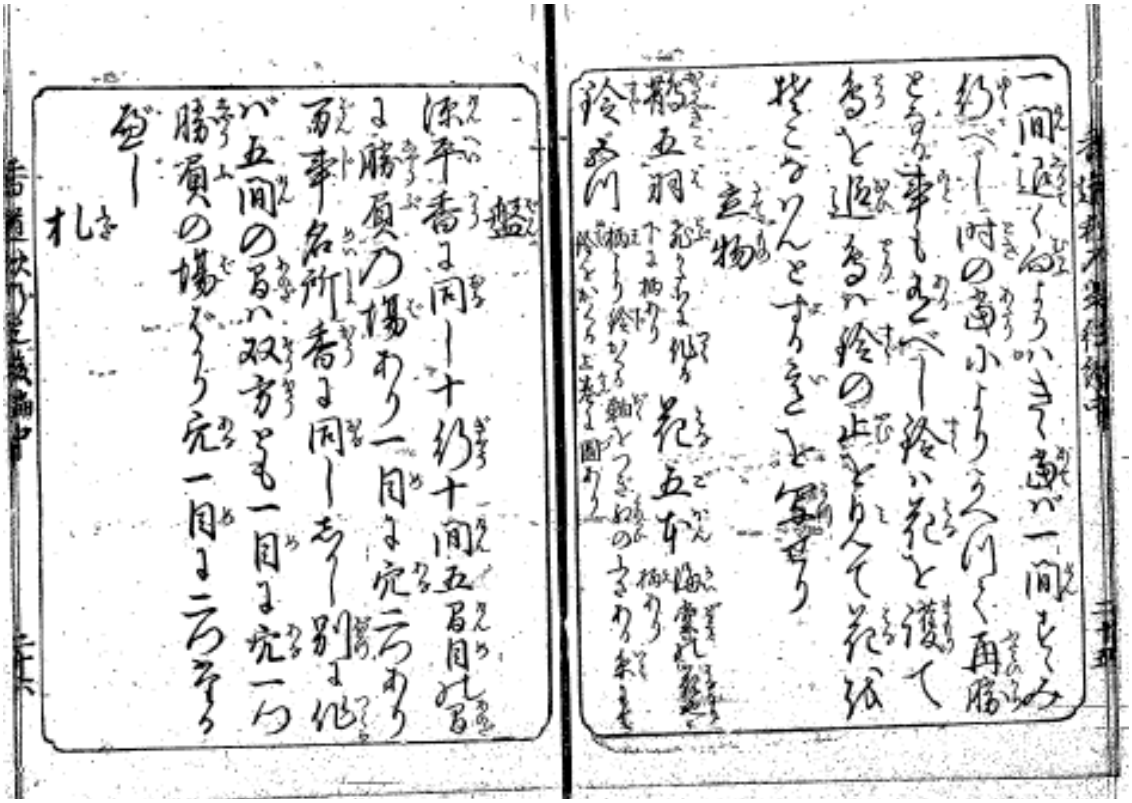
「花」二包　試みなし。客なり。

右試み四包終りて、出香十包打ちまぜ



焚き出す。一炷びらきにて立物すすむ。
左「鈴方」、右「鳥方」と立てわかれ聞くべし。
「客」、一人聞、二人聞の差別なく、
「客」は二間たるべし。餘は当り一間なり。
「鈴」にても「鳥」にても五間すすみ終りて
後、もし鈴の香と鳥の香と聞きちがえ
ぬれば、一間あとへもどるなり。五間進む
うちは、ききちがえ苦しからず。「鈴」にても

「鳥」にても中の五間目の「花の場」に
はやく進み着きたる方、「勝」なり。「鳥」はやく進み
着きぬれば「花」をぬき取り、「鳥」とさしかえる
なり。「鈴」早く進み着きぬれば「花」とならべ「鈴」を立て置く。「鳥方」香を聞き当てるとも
「花」にすすみ着く事あたわず。「盤の勝
負」終りなり。然れども、前に云うごとく進み着き
て後、「鈴」と「鳥」の香、聞きちがえあれば



一間退く。向うよりは聞き当てば、一間すすみ行くべし。時の当りによりかえって再び「勝」となる事もあるべし。「鈴は花を護りて鳥を追い」、「鳥は鈴の止むを見て花をそこなわん」とする意を写せり。

立物

「鵲」五羽　飛ぶかたちに作る。下に柄あり。

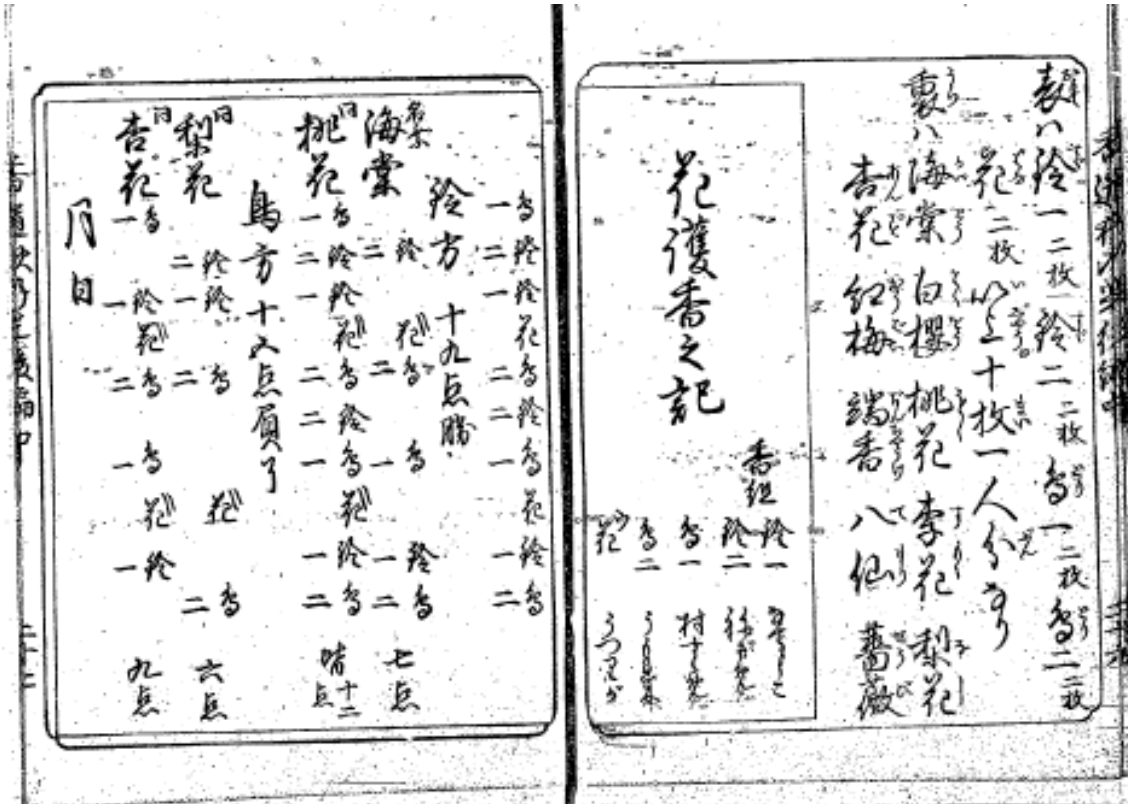
「花」五本　海棠の花なり。柄あり。

「鈴」五つ　柄より鈴かかる軸をつぎ、紅のふさある糸にて鈴をかくる。上巻に図あり。

盤

「源平香」に同じ。十行十間、五間目の間に「勝負の場」あり。一目に穴二つあり。万事「名所香」に同じ。しかし、別に作らば五間の間は双方とも一目に穴一つ、「勝負の場」ばかり穴一目に二つたるべし。

札



表は、「鈴一」二枚　「鈴二」二枚　「鳥一」二枚　「鳥二」二枚

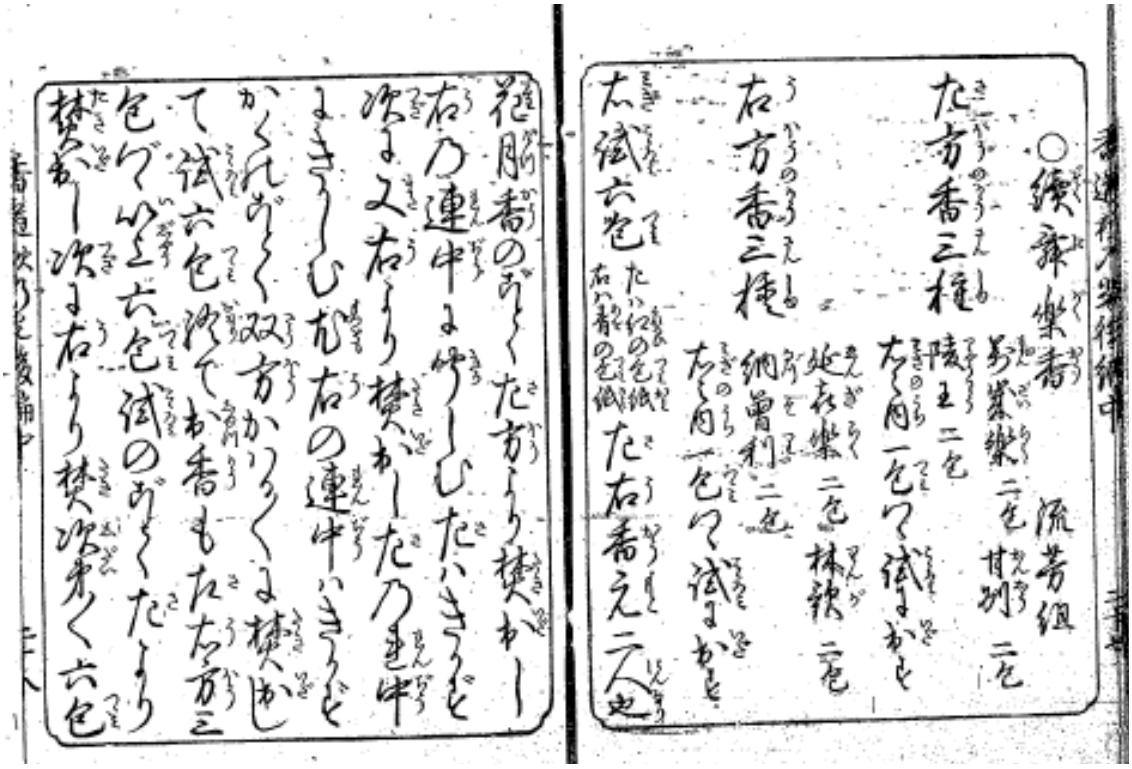
「花」二枚　以上十枚一人分なり。

裏は、「海棠(かいどう)」「白櫻(はくおう)」「桃花(もも)」

「李花(すもも)」「梨花(なし)」

「杏花(あんず)」「紅梅(こうばい)」「端(瑞)香(じんちょうげ)」「八仙(てまり)」「薔薇(しょうび)」

［花護香之記］



○続舞楽香（ぞくぶがくこう）　流芳組

左方の香三種

「萬歳楽」二包　「甘州」二包

「陵王」二包

右の内一包ずつ試みに出す。

右方の香三種

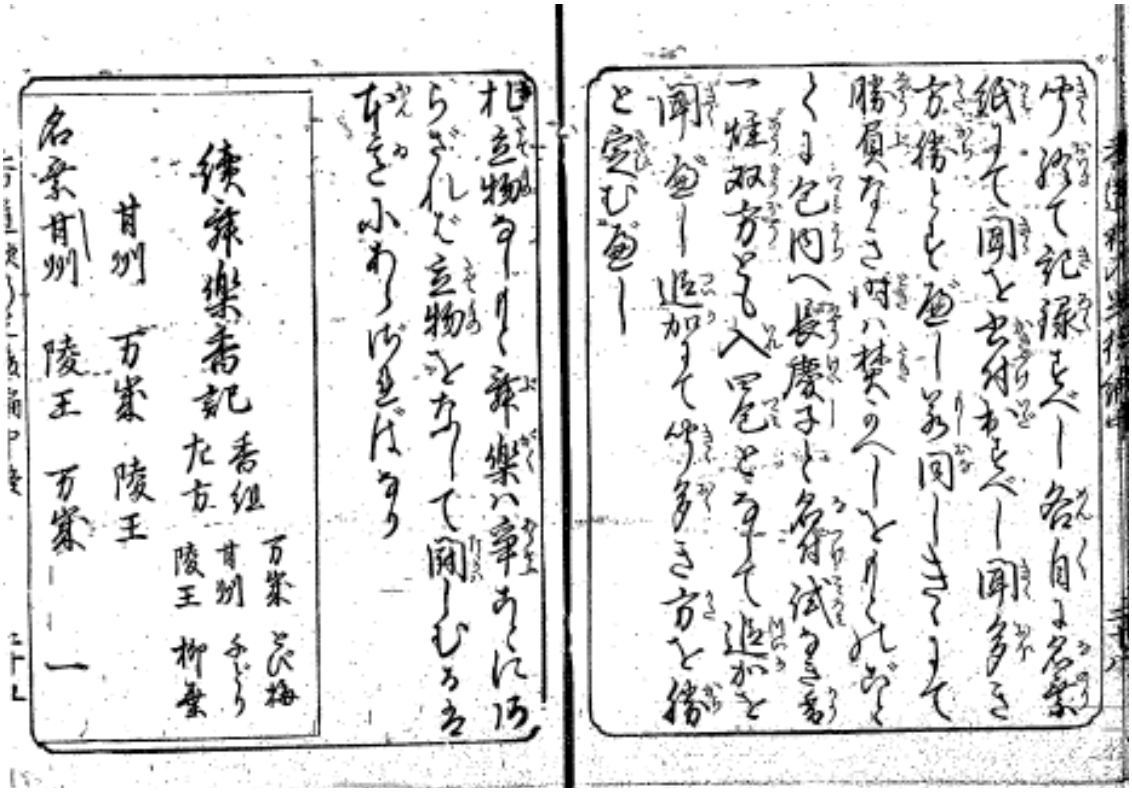
「延喜楽」二包　「林歌」二包

「納曽利」二包

右の内一包ずつ試みに出す。

右試六包、（左は紅の包紙、右は青の包紙）左右香元二人なり。

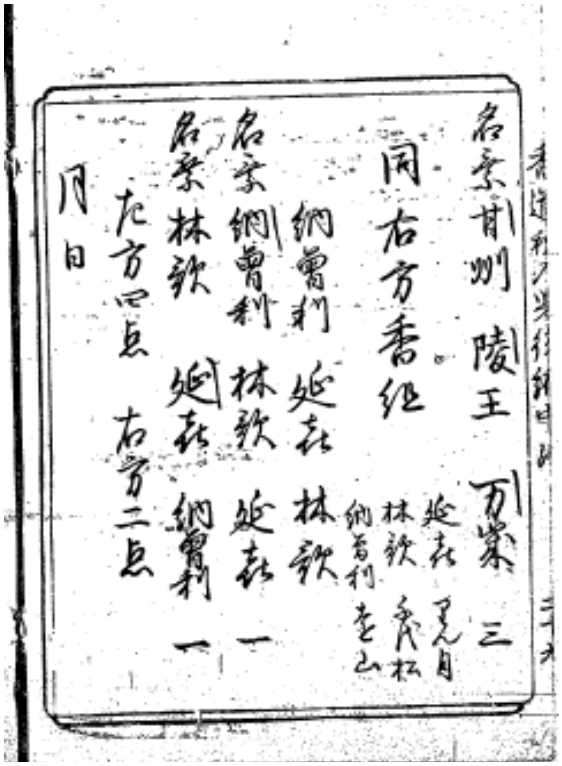
「花月香」のごとく左方より焚き出し、右の連中に聞かしむ。左はきかず。次にまた、右より焚き出し、左の連中にきかしむ。尤も右の連中はきかず。かくのごとく双方かわるがわるに焚き出して、試み六包終りて、出香も左右方三包ずつ、以上六包試みのごとく左より焚き出し、次に右より焚き、次第々々六包



聞き終りて記録すべし。各自に名乗
紙にて聞きを書き付け出すべし。聞き多き
方、「勝」とすべし。もし、同じききにて
勝負なき時は、焚きかえしをもとのごと
くに包内へ「長慶子（ちょうけいし）」と名付け試みなき香
一炷、双方とも入れ、四包となして追加を
聞くべし。追加にて聞き多き方を「勝」
と定むべし。

札、立物なし。もと舞楽は争うことにあ
らざれば立物をなして闘わしむるは
本意にあらざればなり。

［続舞楽香之記］



名柔前州　陵王　万葉　三
延表　五月
林欽　秀松
網曽利　を山
同　右方香紙
網曽利　延表　林欽
名柔網曽利　林欽　延表　一
名柔林欽　延表　網曽利　一
左方四点　右方二点
月日

【凡例】

① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。
④ 青字の（）は、筆者の補足です。
⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

令和二年三月
『香筵雅遊』國井和裕

中巻終り